

様式 (6)

学 位 審 査

学 位 番 号	乙 第 2864 号	氏 名	飯野 高之
審 査 委 員 会	主 査 教 授	亀岡 信悟	
<p>論文審査の要旨 (400 字以内)</p> <p>論文のタイトルは”Subcutaneous Closed Suction Drainage in Elective Open Surgery for Colorectal Cancer Lowers the Incidence of Seroma”である。【目的】手術部位感染 (surgical site infection, SSI) に対して消化器外科手術後の皮下ドレーンに関する報告は少なく、今回我々は大腸癌手術における皮下閉鎖式吸引ドレーン留置による SSI 予防の有効について検討した。【対象と方法】大腸癌手術例 81 例、うちドレナージ施行群=39 例、非ドレナージ群 42 例を対象とした。皮下ドレーンとしては閉鎖式吸引ドレーンを用いドレーン抜去の基準は術後 24 時間での排液が 20mL 以下あるいは 72 時間で抜去とした。両群とも術前後の処置、抗生剤投与方法、開腹、閉腹手技は統一し、SSI の診断は CDC ガイドラインに基づき複数の医師で行った。SSI 発生頻度以外にセローマ発生頻度を primary endpoint とした。【結果】SSI 発生率はドレナージ群 10.2%、非ドレナージ群 7.1%と統計学的有意差は認めない(p=0.618)ものの術後 1 週間での皮下セローマ形成はドレナージ群 20.5%、非ドレナージ群 45.2%と有意差を認める結果となった。術前後の観察項目を赤池情報量基準(AIC)にて予測因子の検討を行った結果、皮下ドレーンの有無(p=0.0344)と術後第 3 病日の血糖値(p=0.0383)に有意差を認めた。【考察・結果】待機開腹大腸癌手術において皮下ドレーンを留置し、感染の培地となりうるセローマを予防することが可能であった。セローマの SSI への関与については今後さらなる大規模研究により明らかにする必要がある。</p> <p>以上、この研究は臨床的に意義があり優れた論文である。</p> <p>本要旨は当該論文が第二次審査に合格した後の 1 週間以内に学務部医学部大学院課へご提出下さい。(本学学会雑誌に公表) [学校教育法学位規則第 8 条]</p>			